

「有待庵」の復元移築について

青山 忠正

1. 再発見の経緯

薩摩藩の大久保利通（1830～1878）は、慶応2年（1866）春から石薬師通寺町東入ルに町屋を入手して活動拠点とした。邸内には茶室があり、密談の場として活用された。この旧別邸は大正3年（1914）から大久保家が所有し、茶室も史蹟として保存公開されていたが、第二次大戦後に至り（1945年以降）、所有者が大久保家と無関係の個人となったことから非公開となり、茶室建物の存在も確認できない状態になっていた。

2019年5月に原田良子氏（京都市在住の歴史研究家）が、この住宅が改築されようとしている現場を偶然通りかかり、解体寸前の茶室建物を再発見した。同時にそれが、外観や間取りなどの構造から見て、慶応期から継承されてきた建物であることを確認した。原田氏から連絡を受けた京都市文化財保護課では、現地調査を経たうえで、所有者から寄付された茶室建物を解体し、その部材を保管中であり、復元移築に向けて計画を進めている。

以下では、本建物の来歴をまとめるとともに、その復元移築にどのような意義が認められるかについて、文献史学の専門的な見地から所見を述べる。なお、基本文献として『大久保侯爵講演 有待庵を繞る維新

史談』（同志社、昭和19年5月）があり、同書からの引用、参照は『有待庵』と略記して頁数を併記する。

2. 大久保邸と茶室

元治元年（1864）4月から慶応3年（1867）末まで、薩摩藩の在京指導部は小松帯刀・西郷隆盛・大久保の3人体制であったが、慶応2年（1866）2月から翌年まで小松・西郷は藩政改革を指導するため、主に鹿児島に滞在し、もっぱら大久保が京都での活動を担当した。

そのため、個人的にも活動拠点を必要とした大久保は、内裏（現在の京都御苑）東側の石薬師通寺町に別邸を構えたのだが、その敷地は60坪、家屋も建坪30坪足らずの狭いもので（『有待庵』37頁）、政治向きの談合には不向きだった。そこで密談に好適な場として茶室を設けたのであろう。

茶室建物は、もとは「御花畑」邸（室町通鞍馬口の東南。近衛家の別邸を小松が借用）にあったものを小松の帰国に際し、大久保が譲り受けて移築したと伝わる（勝田孫弥『甲東逸話』52頁）。鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵の「御花畑絵図」では、北側の庭に茶室建物が確認でき、移築されたとすれば、この建物であったと考えられる。

しかし、「御花畑」茶室と大久保別邸茶室とでは、間取りなどに相違する部分も多いため、完全な移築とは考えにくく、部材を転用した程度かと思われる（KOGA設計室説明書。及び間取り図を参照）。

茶室の間取りは基本的に3畳の畳敷に板床（南側）を加え、吊床（西側）と水屋（東側）を設けた杉皮葺き建物で、位置は敷地南側の中央部、やや西よりの奥まった場所（石薬師通に面する母屋玄関は北側）に、横長（東西約3メートル、南北約2メートル）の形で置かれた。北側、西側、南側の3面が障子戸で、東側は土壁である。母屋とは北側の廊下でつながる（見取り図を参照）。

3. 密談の場として

①薩長間の連絡

慶応2年1月には薩摩藩と長州藩との間で政策提携が成立し（いわゆる薩長同盟）、2月末からは、長州藩の品川弥二郎が連絡要員として京都に潜伏するようになった。品川は薩摩の二本松屋敷（烏丸通今出川上ル東側。現在の同志社大学）に主に滞在したようだが、大久保と密接な連絡を取る必要から、大久保邸にも滞在することがあった。なお、長州藩士は禁門の変（元治元年〈1864〉7月）の咎で、藩主が官位停止・入京禁止の処分を受けていたため、公式には滞京できない。また、大久保邸の南側に隣接する町屋も薩摩藩が借り上げ、長州藩士や諸藩浪士の宿泊所としており、北側に潜り戸を設けて、大久保邸とは表を通らずに往来できる造りになっていた（『甲東逸話』51頁）。

その間、慶応2年2月末から翌年11月まで、品川が大久保から得た重要情報は逐一、長州藩の指導者、木戸孝允（在山口）に書簡で通報されている。また、木戸からはその返事などが品川宛に送られ、品川から大久保に伝えられた。

つまり、この茶室は、まず薩長間の連絡に関わる密談が行われた場所といえる。長州にとっては京都政界の信頼できる情報を、また薩摩にとっては長州側の具体的な情報を、それぞれ入手できる場として、双方の情報が交換される結節点の機能を担った。それが行われる過程は、「薩長同盟」6カ条を、政策提携として実体化させてゆく過程にあたる。

②「王政復古」の密談

慶応3年（1867）6月に入ると、薩摩藩は長州藩と協同して、武力行使を背景とした宮中政変を計画するようになる。この計画は、修正を繰り返したうえで同年12月9日（1868.1.3）に実現する（いわゆる「王政復古政変」）。

これに先立って、岩倉具視・中御門経之ら公家側同志と緊密な連絡を取る必要が生じた。当時まだ岩倉は、洛北岩倉村に蟄居中であったが、その住居は大久保邸から北へ2里にあたり、大久保はしばしばそこを訪れて談合を重ねた。いっぽう岩倉側からも、大原女の姿をした村娘が、頭上の薪の中に手紙を隠して、直接に茶室まで届けに来た。岩倉が洛中帰住を許されて（11月8日）からは、岩倉自身が大久保邸を訪れた（同19日、24日の来訪を大久保の日記から確認できる）。この時も、茶室は情報が集約される場であった。

具体的に、この茶室で行われたことが知られる事例として、錦旗の調整がある。慶応3年10月6日、大久保・品川は岩倉村の中御門の別邸を訪れて、岩倉・中御門らと新政体の構想等について話し合った。大久保・品川は帰邸後、茶室において錦旗の作成に取り掛かった。まず大久保の側室、杉浦ゆうの用いる品と称して、西陣から帯地を取り寄せた。品川はそれを山口に運び、日月章（太陽と月をデザイン）の「錦旗」各2旒ほかに仕立て、1組を山口に保管、1組を京都に持ち帰って（11月23日着京）、相国寺内（薩摩の二本松屋敷）に保管した。鳥羽・伏見戦で掲げられたものは、これらである（以上、『品川子爵伝』255頁、『大久保利通伝』中巻167頁、『甲東逸話』59頁、『有待庵』33頁を参照）。

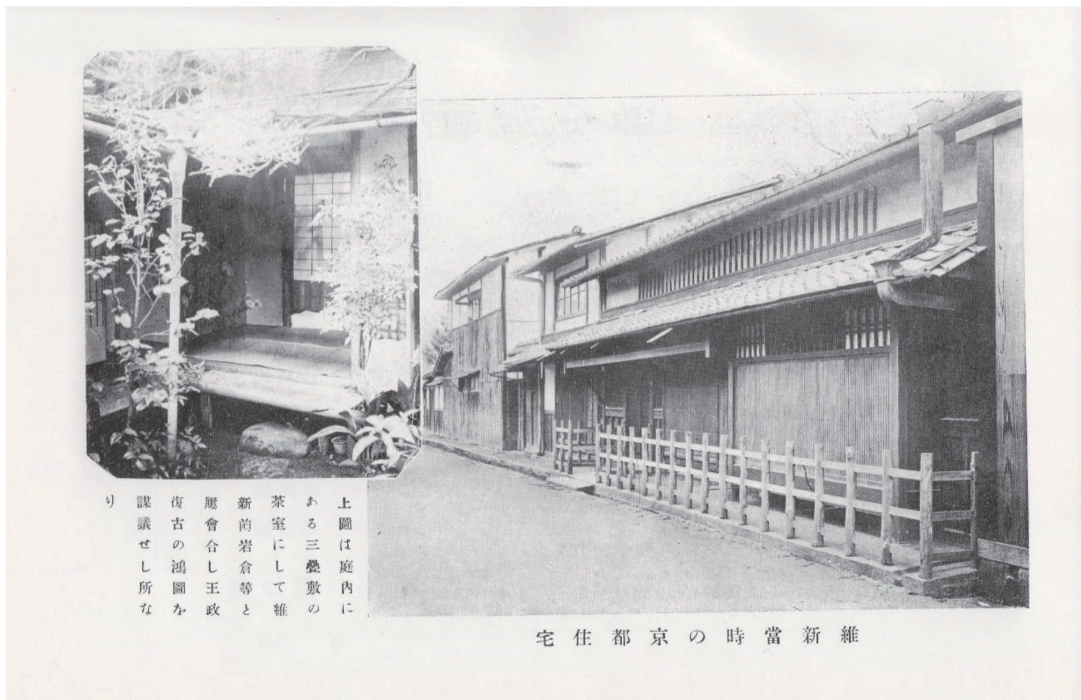
③木戸孝允の宿泊

慶応4年（9月に明治改元。1868）1月3日～6日の鳥羽・伏見戦ののち、木戸孝

允は新政府の命により、2年ぶりに上京した。着京は同22日。26日夕刻には大久保と三本木の料亭で会飲したあと、そのまま北側スグの大久保別邸に宿泊した（『大久保利通日記』、各日の条）。この時点では大阪遷都が緊急の政治課題となっていたが、27日午前中には、おそらく茶室で、これらに関する2人きりの談合が持たれたことであろう。

4. 大久保利武による入手と 補修・公開

大久保利通は慶応4年（1868）6月、東京に本拠を移すにあたり、別邸を家来の一人に与えた。その後、所有者は転々としたが、明治7年（1874）頃までには、もと宮廷女官「寺島富子」の所有となり（原田論文2021年を参照）、40年間余り隠居の住まいとして用いられ、「割合よく保存され



『大久保利通伝』中巻、口絵写真

て」いたという（『有待庵』37頁。）。

勝田孫弥『大久保利通伝』中巻（同文館、明治43年10月）の口絵には、茶室及び旧邸建物（石薬師通に面する）の写真（以下、古写真A1, B1）が掲載されている。これらは寺島所有時代のもので現存最古の写真だが、撮影時期は明治33年（1900）以前と判断される。

その判断根拠について補足する。実はこの古写真A1, B1は、現在、京都大学貴重書デジタルアーカイブに、「維新特別資料文庫」所収として公開されている写真画像と全く同一である。該当画像は同文庫「写真記録」のうち「写真類」のコマ番号319～322/412の4点で、319が「旧宅茶室」（古写真A2）、320がその裏書、321が「旧宅」（古写真B2）、322がその裏書である。「維新特別資料文庫」は、すなわち

品川弥二郎（1843～1900）が収集した「尊攘堂」資料であり（品川の没後に京都帝大に移管）、そこに収められているなら、撮影時期は品川の没年、明治33年（1900）以前と判断されるわけである。なお、2枚の裏書には、ともに所在地番と「（現住者一寺島正之）」の記入、「侯爵 大久保利和」の記名、上部に「寄贈」と記入がある。これらは同一筆跡であり、利和（としなか、1859～1945。利通の長男で大久保家を継承）本人の自筆とみられる。

その建物と敷地を、利通の3男、大久保利武が大阪府知事（在任1912～17）を勤めていた当時、大正3年（1914）3月に寺島家から譲り受けた。購入資金の調達に際して利武は、従兄弟（利通の甥）山田直矢から、金融面で支援を受けたことが明らかになっている（原田論文2023年）。利武の



茶室の間取り図（京都新聞、2019年6月13日付）

錦の御旗製作に関わる品川弥二郎書簡原本と大久保利通旧邸図（原田良子）

4 大久保家に保管の旧邸見取り図

(1) 旧邸外観写真の検討

大久保家に保管されていた多くの資料が国立歴史民俗博物館に寄贈されたが、なお大久保利泰氏が保管されていた資料（以後、大久保家資料）がある。

その中にある「原 大久保利通侯之旧屋敷地」と題する詳細な旧邸見取り図（写真①）を令和5（2023）年3月に提供いただいた。残されている最も古い旧邸外観写真と見取り図をまず比較しておきたい。

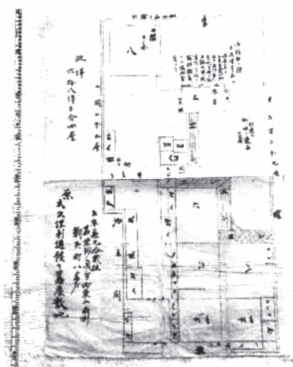
博物館に大久保家から寄贈されて所蔵されている写真資料でもっとも古いと思われる旧邸外観写真が写真②⁶である。昭和2年建立の京都市教育会石碑はまだなく、下水道整備にともなって取り払われた玄関脇の駒寄せがまだ存在している。側溝も両側とも石積みでつくられた古い形態をのこしている。この写真と同じものが本誌前号で取り上げた茶

室写真とともに尊攘堂旧蔵写真（現「維新特別資料文庫」（京都大学））の中にある。茶室写真裏の大久保利和寄贈とのメモが外観写真にもある。

前号でも述べたように、明治43年刊行の勝田孫弥『大久保利通伝』（同文館）にこの茶室写真は掲載されているので外観写真も明治43年以前の写真であることは間違いない。同じ外観写真が尊攘堂、大久保家両方にあることから利和が撮影し、大久保家にも残した写真とみてよいだろう。

尊攘堂旧蔵写真の裏には現住者寺島正之と書かれている。旧土地台帳によれば寺島正之は明治41年から旧邸の所有権者なので、写真は明治42年前後に撮影されたと考えられるだろう。

寺島富子は国会図書館デジタルコレクションで検索すると各年代の官員録の類⁷にヒットする。職掌は女孺であり、皇后付であったことが明治9年の

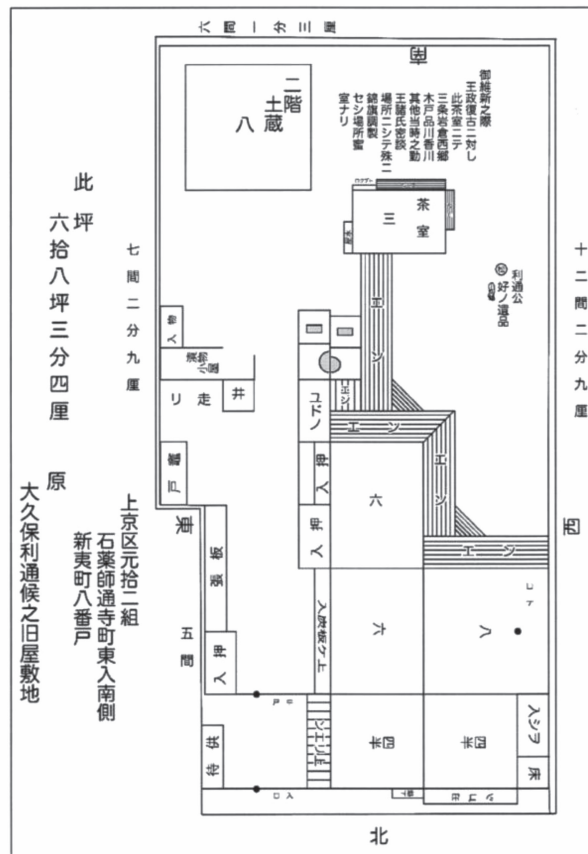


写真① 原大久保利通侯之旧屋敷地（大久保利泰資料）



写真② 旧邸外観写真（国立歴史民俗博物館蔵）

※模式図は京間1間を基準に作成した。それ以外は見取り図をもとに配置を按配している。



図① 旧邸見取り図をもとにした模式図

みならず、利通の縁戚者たちが協力して旧邸の買い戻しにあたったのである。母屋の建物は「大工の話では少なくとも百年以前の普請とのこと」であった（『有待庵』37頁）。

大久保利謙（としあき。利武の長男。日本近代史家として、のち立教大教授）の記す所では、「入手当時（茶室）は既に頗る荒廃して居りました」という（『有待庵』跋文、45頁）。その状態は、古写真A2（モニター画面で拡大し、細部を点検できる。北側西寄りから撮影）から推察できるが、北側庇には樹木の枝葉が垂れ下がっているし、室内の南側障子もはずれたまま、やや東に寄せて立てかけられている。画面の左に見える柱状の物体は、屋根から続く雨樋であり、補修後の写真には見られないので、もともと存在しなかったものであろう。たしかに「荒廃」しているように見えるが、基本的な外観や間取りには、補修後の状態と比較して変化がない。

利武は茶室の保存公開を念頭に補修を加えた。慶応期の状態に復元することを目標とした補修であり、単なる修繕ではない。入手直前に利武が牧野伸顕（次兄）に宛てた大正3年3月4日付書簡では、

「多少手を入れ、成るべく（利通）御住居

当時の旧形其の儘に保存致させたく存じ居り候、幸いに手を入れなば旧事の面影を復すること相叶い候事と存じ候」

と述べている（原田論文2023年に写真版と翻刻を掲載）。

また利謙も、「その修繕にも勉めて旧態の保存に心懸け」と記す（『有待庵』45頁）。

入手の翌年、大正4年（1915）11月には、大正天皇の即位儀礼が京都で行われる。これを機に京都に集まった各界の名士を、利武は茶室に招き、茶会や小宴を催して、懐旧談に花を咲かせた。この時までには補修も一通り完了していたとみてよい。

5. 大正～昭和期の「有待庵」

大正3年に開かれた、そのような会合の席上、朝日新聞の記者で漢文の大家、西村天囚（時彦）は、茶室に「有待庵」という名をつけることを提案し、利武を喜ばせた。利通は普段から、「来たらざるを待まず、待つ有るを待む」（敵は来ないだろうと多寡を括るのではなく、いつ来てもよいように待機の姿勢を取る。出典は『孫子』など）の語句を好み、揮毫を依頼された時も、よく「有待」の2字を書いたという。この



大久保書「有待」の額、『京都維新史蹟』京都市教育会、1928年

逸話にちなんだものである。

翌4年11月、西園寺公望（首相経験者。元老）が上京して茶室を訪れた際、利武は命名の由来を語り、西園寺も直ちに賛成して、扁額に仕立てるため、「有待庵」の字句を書いた。こうして「有待庵」の命名が確定した（以上、『有待庵』10～11頁）。この西園寺書の扁額は現在まで伝えられて、保管されている。

昭和3年（1928）11月には、昭和天皇の即位儀礼が、やはり京都で行われるが、この時も利武は先帝の時と同様に、名士たちを茶室に招いた。この間、大正期から昭和初期にかけ、茶室を訪問した人々は芳名録に記帳し、あるいは名刺を残しており、延べ人数は約300名に上る（国立歴史民俗博物館所蔵「大久保家資料」。原田論文2023年）。

やがて昭和17年（1942）11月6日、利武は同志社総長牧野虎次の依頼で茶室を会場に、「有待庵を繞る維新史談」と題する講演を行った。その講演速記に加筆し、記録として公刊された冊子が、『有待庵を繞る維新史談』（同志社、昭和19年5月）である。

しかし、公刊当時はすでに第二次大戦の末期であり、翌年8月の敗戦とともに「有待庵」に対する人々の関心も薄れ、ついには大久保家も旧邸を手放し、史蹟として保存公開される機会も失われた。こうして、いったんは歴史の闇に埋もれた「有待庵」が、再発見されるに至った経緯は、冒頭に述べたとおりである。

6. 復元移築の意義

現在の時点で「有待庵」を復元する場合、どの時点の状態を目標とするかが、まず課題となる。それは大正3年（1914）以降に、大久保利武が行った補修後の状態を目標とすることが至当と考えられる。

その理由は、第1に、大久保利武・利謙が明言しているように、その補修が慶応期の状態に復元することを目指したものであったからであり、必要不可欠な部材の新調はあったにしても、無意味な改変は加えられていないものと信用できる。第2に、その状態については、大正～昭和初期に撮影された鮮明な複数の写真（外観あるいは室内）や、補修開始直前と見られる間取り図などを手掛かりとして、かなり正確に復元することが可能である。第3に、さかのぼって大正3年以前の状態については、当時の所有者による改変等について、史料（文献）や資料（図面など）が古写真A2、B2以外に発見されず、判断の手掛かりがない。もとより、慶応期の状態を直接に示す写真等は残されていない。

以上に基つき、復元は、大正4年（1915）11月までに一通り完了した補修後の状態を目標とすべきと考えられる。それを実行し、一般公開したとして、その意義はどこにあるか。

それは単に大久保・岩倉の密談の場といったエピソード的な関心に留まるものではない。歴史的な事実を正確に理解するためには、それが生じた空間に関わる理解を背景に置くことが、重要な要素となるのである。

具体的には、ある談合の内容が一次史料（書簡や日記）に記載されていたとして、その談合が、どのような場で行われたのか、例えば公式的な会議の席上か、あるいは私邸での私的な談合かといったことは、その内容を理解するうえで大きな意味を持つ。先に述べたように、慶応2年～3年における薩長間の連絡協議は、大久保別邸の茶室という狭い空間において行われていたのであり、その内容は、その前後の薩摩・長州

両藩の政策決定にあたり、きわめて大きな意味を持った。その現場を体感できることは、史料の読解に際して、ひいては歴史事実の理解に際して大きく貢献するであろう。「有待庵」は、それを実践できる稀有の場といえるのである。なお、移築先として「岩倉具視幽棲旧宅」の敷地内が予定されているが、これも岩倉と大久保の関係の深さからみて、適切な選択と思われる。

あおやただまさ
青山忠正（佛敎大学 名誉教授）

【参考文献】

- 原田良子『『御花畑』絵図と符合』、2019年6月13日『京都新聞』。
- 同 「大久保利通の茶室『有待庵』発見と来歴について」京都地名研究会『地名探求』19、2021年3月。
- 同 「大久保利通の茶室『有待庵』の来歴について新史料の紹介」同上21、2023年3月。
- 同 「錦の御旗製作に関わる品川弥二郎書簡原本と大久保利通旧邸図」同上22、2024年3月。
- 勝田孫弥『甲東逸話』富山房、1928年（マツノ書店、2004年復刻）。
- 村田峯次郎『品川子爵伝』大日本図書、1910年（マツノ書店、1989年復刻）。
- （株）KOGA建築設計室「有待庵の移築に係る構想・設計業務委託基本構想説明書」2024年2月。

【史料】

- 「品川弥二郎日記」、日本史籍協会編『維新日乗纂輯』2、東京大学出版会、1925年（1982年覆刻再刊）に所収。
- 日本史籍協会編『大久保利通日記』1、東京大学出版会、1927年（1983年覆刻再刊）。
- 同上編『木戸孝允文書』2、同上、1930年（1985年覆刻再刊）。
- 木戸孝允関係文書研究会編『木戸孝允関係文書』4、東京大学出版会、2009年。